第４１回
中区明るい選挙推進作文コンクール

入賞作品集

中区明るい選挙推進協議会

第４１回　中区明るい選挙推進作文コンクール

「中区明るい選挙推進作文コンクール」は、大切な選挙や、選挙につながる「まちづくり」をテーマとした作文を夏休みの課題として区内在住在学の小・中学生から募集し、政治や社会の仕組みに関心を持ってもらうとともに、選挙に関する意識を社会的にも高めることを目的として、毎年開催しています。

今年度は、小学生Ａ部門（１～３年生）に２６６作品、小学生Ｂ部門（４～６年生）に５７０作品、中学生部門に２２５作品、合計１０６１作品もの応募が寄せられました。応募作品は、区内小・中学校教諭、中区明るい選挙推進協議会会長、中区選挙管理委員会委員長、中区長により審査され、各部門において金賞１名、銀賞２名、銅賞３名、合計１８の優秀作品が選ばれました。

■小学生Ａ部門（１～３年生）
テーマ　「わたしのまちのすきなところ」

■小学生Ｂ部門（４～６年生）
テーマ　「より良いまちをつくるために私たちにできること」

■中学生部門
テーマ　「選挙について考える」

入賞作品は中区役所ホームページにも掲載しています
https://www.city.yokohama.lg.jp/naka/kusei/shikai-senkyo/keihatsu/

目次

― 小学生Ａ部門（一～三年生）―

・金賞（中区長賞）
私の町の大和町しょう店がい　立野小学校　二年　野村　桜來子…1
・銀賞
きせつを感じる本もく　間門小学校　三年　上関　麗太…2
みなとみらいオリンピック　間門小学校　二年　立花　歩大…3
・銅賞
山手のしょう店がい　立野小学校　二年　廣内　悠乃…4
わたしの町よこはまし中く　立野小学校　二年　花里　玲奈…5
横浜の歴史　間門小学校　二年　草野　楓大…6

― 小学生Ｂ部門（四～六年生）―

・金賞（中区選挙管理委員会委員長賞）
バリアフリーでくらしやすいまちに　本牧南小学校　四年　佐藤　大嘉…7
・銀賞
まほうから無限の笑顔　立野小学校　六年　齋藤　陽…8
人間のチカラ　立野小学校　六年　藤田　明凛…9
・銅賞
未来の本郷町にむけて　大鳥小学校　六年　北野　瑠海…10
世界中の人々とつながるために　立野小学校　六年　石上　凱久…11
差別のない明るいまちへ。　立野小学校　六年　速水　玲愛…12

― 中学生部門 ―

・金賞（中区明るい選挙推進協議会会長賞）
三年後のために　横浜雙葉中学校　三年　関口　ひかり…13
・銀賞
選挙は遠くて近いもの　仲尾台中学校　二年　櫻井　駿斗…14
納得する政治のために　横浜吉田中学校　二年　永井　悠理…15
・銅賞
投票率の低下への解決策とは？　仲尾台中学校　三年　池田　怜那…16
「今の私たち」なら　仲尾台中学校　一年　池田　華江…17
投票と自分の未来　本牧中学校　三年　川村　雄翔…18

小学生Ａ部門

☆＊＊ 金賞（中区長賞） ＊＊☆

「私の町の大和町しょう店がい」

立野小学校　二年　野村　桜來子

私の町には夕方になると、もくもくとやき鳥のいいにおいにつつまれる「大和町しょう店がい」があります。私は、学校のじゅぎょうでそこへ町たんけんに行きました。もりやはきもの店になんども行きました。もりやさんはむかしからずっとつづく三だい目のお店です。もりやさんのよいところは、たくさん話をしてくれるところです。はきものいがいのことでも町のことやむかしのことも教えてくれます。私はねだんつけやお店のそうじの手つだいもさせてもらいました。

しょう店がいにはほかにもむかしからのお店がいくつかあります。じゅぎょうで学ぶ前は、通るだけで店に行ったことはありませんでした。お母さんにどうしてか聞くと「スーパーやネットで買う方が楽だから」と言っていました。でもたくさんのお店を好きになり、もっと行きたいと思うようになりました。

今しょう店がいはカフェやマンションがふえて人通りも少なくなりました。みんなが行かなくなってお店がつぶれていったらしょう店がいがなくなってしまいます。そこを歩くと人の声や「おかえり」「あついね」と声をかけてくれる人、音やにおい、店にならんだものを見れば今のきせつが分かります。町のじょうほうも分かります。はんたいにスーパーやネットで買うと物がたくさんあって楽だけど人との会話がありません。そんな生活ばかりだとつまらないと思います。

手うちそばのどう画を見せてくれたおそばやさんや、店じゅういい香りがするお花やさん、しらすをくれた魚やさん、せんざいをくれたクリーニングやさん、やさしいお店の人たちをもっとみんなに知ってほしいと思います。お母さんにそのことを話したら「こんど行ってみたい」と言っていました。

大すきなしょう店がい、ずっとつづくといいなぁと思います。

〈講評〉

「もくもくと焼鳥のいいにおいにつつまれる」という冒頭から最後まで、身近な商店街を五感でとらえる筆者の感受性豊かな文章に惹きこまれました。商店街を行きかう人々が目に浮かび、まるで匂いまで感じられるかのような、いきいきとした作文です。また、近年の商店街離れに対する問題提起を行いながら、人々とのふれあいのなかで感じた、あたたかな商店街の良さを、しっかりと伝えてくれました。

中区にはこの大和町商店街をはじめ、魅力的な商店街がたくさんあります。中区の未来を担う子供たちに「大すきなしょう店がい、ずっとつづくといいなぁ」という気持ちを大切にしていってほしいと思います。

☆＊＊ 銀賞 ＊＊☆

「きせつを感じる本もく」

間門小学校　三年　上関　麗太

ぼくがすんでいる本もくには、たくさんのみりょくがあります。ぼくが、一ばんすきなところは、きせつを感じることができる本もく通りです。

まい朝、学校に行く通学路の本もく通りは、春になるとたくさんのさくらがさきます。通学路いっぱいにさいているさくらは、ぼくたちを見まもってくれるようにさいていて、とてもきれいです。夏になると、せみの声がします。友だちと虫を見つけながら、学校に行くことは、とても楽しいです。そして、なんだかその声は、夏が近づいてくる気持ちになって、とっても元気になれる気がします。秋になると、みどりだった葉がたくさんの色に変化します。黄色やオレンジ色など、まるで絵の具で絵をかいたように、すてきな色に変わります。どんぐりを見つけた時は、なんだかいいことがありそうな気がします。冬になると、たくさん色づいていた葉が茶色になって、落ち葉がたくさんあります。まちには、イルミネーションがついて、あざやかな色がまちじゅうにひろがります。クリスマスが近づくのをじゅんびしているすがたを見ると、ぼくも心がワクワクして、サンタさんが来るのを楽しみにまちます。本もく通りは、きせつによって、さまざまな色に変わります。そして、ぼくはそのきせつの変わるすがたを見て、いつも心があったかい気持ちになります。

ぼくは、このすてきな通りを、いつもきれいにまもってくれるまちの人たちが、一ばんのみりょくだと気づきました。それぞれのきせつが来るたびに、まちが変わることをみんながきれいにしてむかえています。だからぼくは、いつもきせつを感じることができて、次のきせつをたのしみにすることができるのだと思いました。

まちの人たちに、かんしゃの気持ちをもって、ぼくがすきな本もく通りがある、この本もくの、きせつを感じることができるみりょくを、みなさんにも感じてほしいと思います。

〈講評〉

季節ごとに書かれた本牧通りの魅力が情景として想像できる、素晴らしい作品です。色彩、音、温度などの感覚、心の揺れ動き、それらが全て文章として表現されています。そして、その本牧通りを守ってくれている町の人の存在に、筆者は一番の魅力を感じています。町は住んでいる人みんなで作り上げていくものです。

筆者の言う通り、感謝の気持ちをもって、これからも町を大切にしていきたいですね。

☆＊＊ **銀賞** ＊＊☆

「みなとみらいオリンピック」

間門小学校　二年　立花　歩大

ぼくは、よこはまのみなとみらいオリンピックがあったらいいなと思います。

みなとみらいオリンピックは、、よこはまとかみなとみらいの近くにすんでる人なら、日本人でもがい国人でもだれでもさんかできるオリンピックです。きっと、すごくもりあがると思います。どうしてかというと、よこはまには、いろんな国のがい国人がいるからです。

たとえば、ぼくのなかよしの友だちは中国人で、こうえんとか学校でよくいっしょにあそんでいてたのしいです。

ぼくのクラスにいるアメリカ人の友だちは、えいごのじゅぎょうのときに大かつやくをしています。

あと、ぼくがならっている空手教室にもアメリカ人がいて、つよくてやさしいのでよくわざを教えてくれます。

ロシア人の友だちがうちにあそびにきたこともあります。

それからぼくのうちのとなりには、オーストラリア人のかぞくがすんでいるし、近くのカレーやさんではインド人の人がはたらいています。そこのカレーはおいしくて、デザートのサービスもしてくれました。

ほかにも、こうえんとかお店でもいろんながい国人を見ます。

ぼくは空手とラグビーをならっているので、もしみなとみらいオリンピックがかいさいされたら、ラグビーと空手のしゅもくに出て、金メダルをとりたいです。お兄ちゃんは、サッカーに出るそうです。お母さんは、せいかランナーで山下こうえんをはしりたいそうです。お父さんはみなとではたらいているので、ガントリークレーンにはたをむすびつけて、ふねの汽てきをならしておうえんするかかりです。

きっと今よりもっといろんな国の人たちとなかよくなれると思います。

〈講評〉

みなとみらいオリンピックという素敵な考えから、筆者の「町が好き」という気持ちが伝わってきます。また、筆者の身近には様々な人がいて、それらの関りが筆者にとって楽しい思い出になっていることが分かります。中区には様々な人が住んでいます。それらの人とスポーツを通じて分かり合えたら、きっと楽しいに違いありません。いつかこんなオリンピックが開催できるように、町や人との関りを大切にしていきたいですね。

☆＊＊ 銅賞 ＊＊☆

「山手のしょう店がい」

立野小学校　二年　廣内　悠乃

わたしのすんでいる山手には、色んなお店があります。お花やさん、レストラン、パンやさん、だがしやさん、カフェ、コンビニ、スーパーマーケット。

わたしは、なにかがんばったとき、ごほうびに百円をおかあさんからもらって、だがしやさんに出かけます。百円で四こくらいのおかしがかえます。おとうとも百円もらえますが、けいさんできないので、わたしがかわりにけいさんします。九十九円でかえたときは、お店のおばあさんが「上手にけいさんできたね」とほめてくれます。このだがしやさんは、おかあさんが生まれるまえよりもずっと前からあるそうです。すごいです。

わたしは学校のじゅぎょうで「まちたんけん」をしました。しょう店がいにいって、色んなお店の人にインタビューをしました。その中に「サンデス」というインドカレーやさんがありました。はたらいている人はみんなネパール人です。インタビューで「一ばん人気のジュースはなんですか？」ときくと、「マンゴーラッシーです」とおしえてくれました。わたしはマンゴーラッシーってどんなあじだろう？と思いました。いえにかえっておかあさんにその話をすると、わたしが学校に行っているあいだにマンゴーラッシーをかってきてくれました。すこしヨーグルトみたいなあじがして、おいしかったです。

わたしのすんでいるまちには、わたしの知らないお店がまだまだあります。色んな年の人、色んな国の人がはたらくお店がたくさんあるところが山手のいいところだとわたしは思います。

わたしは大きくなったらお花やさんかケーキやさんになるのがゆめです。山手のしょう店がいにもお店をひらけたらいいなと思いました。

〈講評〉

商店街といえば、八百屋、魚屋などの多くの店が立ち並び、行き交う人々の何気ない会話が聞こえる情景が目に浮かびますが、今ではシャッターが多くを占め、商店街という言葉に懐かしさを覚えてしまいます。筆者は、身近にある商店街に興味をもち、その魅力に気づいています。ボタン一つで商品を注文できるようになった便利な時代だからこそ、商店街という人の温もりが感じられる場所を、これからも大切にしていってほしいです。

☆＊＊ 銅賞 ＊＊☆

「わたしの町よこはまし中く」

立野小学校　二年　花里　玲奈

わたしは立の小学校にかよっていて、わたしのうちのまわりには、ともだちの家やスーパーマーケットや公園などがあります。

よこはまし中くには、いろんなばしょがあります。たとえば、いろんな公園や、いろんな小学校や、いろんなお店やいろんなえきやうみやホテルもあります。公園といえばねぎし森林公園や山下公園などがあります。小学校は、立の小学校やまかど小学校があります。お店は、スーパーマーケットやホームセンターがあります。

わたしの町のすきなところは、川や海があって、公園には、木やしょくぶつがたくさんあります。そして、たくさんのアスレチックやゆうぐ、たくさんのえがおな子どもたちがいるところが大すきです。

ほかにすきなところは、いろいろなしょう店がいがあり、たくさんの楽しいお店があるところがすきです。わたしがよく行くしょう店がいは、元町しょう店がい、やまと町しょう店がい、山元町しょう店がい、ば車みちしょう店がいです。

わたしがかよっている立の小学校では、町たんけんをします。立の小学校のまわりのやまと町しょう店がいをたんけんしました。なので、やまと町しょう店がいが大すきです。

その中でも、元町コーヒーというお店が一ばんすきです。どうしてかというと、お店が木でできていて、しょくぶつがたくさんあって、お店の中がいつもコーヒーのいいにおいがするからです。そして、お店の店長さんは、とてもやさしいです。もちろん、ほかのお店の人たちもみんなやさしくて、町が大すきです。

わたしが思ったことは、みんながやさしいくらしをして、しょう店がいの人もみんなえがおになってやさしいしょう店がいになってほしいと思います。

そして、わたしはこの町をこれからも楽しみたいです。

〈講評〉

この作品は、中区の町の魅力が多く書かれています。様々な場所には、そこを使う人がいて、たくさんの人が使えば、様々な感情が交わっていきます。楽しい、嬉しい、が積み重なって大好きにつながっていく。そんな大好きが中区には溢れているんだな、と筆者の文章から感じました。この連鎖を止めないよう、自分も町の魅力を楽しみながら、みんなが笑顔で　暮らせる町づくりをしていくことが大切だと思いました。

☆＊＊ 銅賞 ＊＊☆

「横浜の歴史」

間門小学校　二年　草野　楓大

横浜のまちの良いところは、歴史をかんじられる場所やものが、みぢかにたくさんあるところだと思います。

ぼくは休みの日に、か族とよく山下公園やみなとみらいまでさん歩に行きます。その時にも、氷川丸や日本丸を見たり、赤レンガ倉庫で昔のせんろをみつけたりすることが出来ます。お父さんといっしょに、昔の人たちのくらしを考えて話をするのはとても楽しいです。

ぼくが、ほうか後に友だちとサッカーをしに行く本牧市民公園にも、ＳＬがほぞんされていたり、三けい園があったり、バスケットをしに行くねぎし森林公園には、けい馬場あとがあったりと、歴史をかんじられる場所やものが、ぼくたちのあそぶ場所にたくさんあります。

ぼくのお父さんとお母さんがけっこんしきをしたホテルのかべにも黒船が来た時の絵があるのをアルバムで見たことがあります。黒船が来た時のことは、歴史の本で読んだことがあったので、しゃしんを見た時はとてもびっくりしました。そして、今のみなとみらいのけしきと絵のけしきを見くらべて、大きなたてものがなかったり、黒船を見ている人たちがきものをきていたり、同じ場所なのにふんいきがだいぶちがって、おもしろいと思いました。

このように、まちのいろんな所に歴史を感じられる場所があるのが、横浜のまちの良いところだと思います。だから、ぼくも歴史あるものをだいじにしていけると良いなと思います。

〈講評〉

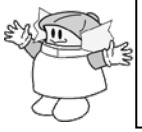
中区には新しい建物もあれば、古い建物もあります。人々は新しいものに目が移りがちですが、歴史ある古いものを大切にする心も忘れてはいけません。筆者は、身近にある歴史を、感じ取ったまま文章に記しています。新しいもので溢れている世の中だからこそ、ふと目を歴史に向ける筆者の姿勢が、とても感慨深く感じました。歴史あるものを大事にしていきたい筆者の思いを、ぜひ見習いたいですね。

小学生Ｂ部門

☆＊＊ 金賞（中区選挙管理委員会委員長賞） ＊＊☆

「バリアフリーでくらしやすいまちに」

本牧南小学校　四年　佐藤　大嘉



「バリアフリー」を知っていますか。バリアフリーとは、生活してくうえで障害となるものを取りのぞくことです。ぼくはこのバリアフリーについて調べてみました。すると、ぼくのまちの身近にあったものが、どのような人でもくらしやすくするためのものだとわかりました。例えば、「カッコー」「ピヨピヨ」と音の出る信号機です。これは、目の不自由な人が横断歩道をわたるときに、歩行者用信号が青色のとき音を鳴らして青色であることを知らせます。この信号機の他にも、目の不自由な人のために設置されている点字ブロック、お年よりや体の不自由な人でも乗り降りしやすいノンステップバス、車いすの人の乗り降りに役立つエレベーター内にあるミラーなど、どのような人でも利用しやすい設備がたくさんありました。このような設備がもっとたくさん設置されたら、みんながくらしやすい、よりよいまちになると思いました。

ぼくが、バスに乗ったときのことです。席にすわっていると、白いつえを持った人が乗ってきました。ぼくは「目の見えない人だ。ゆずってあげよう。」と思い、席をゆずりました。これは、バリアフリーではないと思うけれど、こんなふうにバスや電車などで、お年よりや障害のある人に席をゆずるというのも大切なのではないかと思います。なので、バリアフリーだけを目指すのではなく、大変そうにしている人を見かけたら自分になにかできることはないか考えて行動する人がふえていけば、もっとよいまちになると思います。

まちのバリアフリー化が進んでも、本当にくらしやすいまちになったとはいえないと思います。生活をするうえでくらしにくさを感じることの多い人たちの、くらしにくさを自分のこととして受け止める気持ちが必要です。点字ブロックが歩道にあっても、その上に自転車などの物を置いてしまったら、点字ブロックの意味がなくなってしまいます。すべての人にわけへだてなく接することができる「心のバリアフリー」がこのまちに広がっていくことで、本当にくらしやすいまちになっていくと思います。

まちにバリアフリーの設備がもっとふえて、たくさんの人が人を気使うことができるようになり「心のバリアフリー」が広がってほしいです。そうなれば、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の17の目標うち、10「人や国の不平等をなくそう」、11「住み続けられるまちづくりを」の達成につながるのではないかと思います。これからも、ぼくにできることはなにか考えて、人を助けたり、よりよいまちにするための力になりたいです。

〈講評〉

筆者はまず身近にあるバリアフリーに関心を寄せました。そして一つ一つの現物を観察してその特徴を丁寧に作文しました。これが読者を引きつけたと思います。

そこから自分の行動体験を通して、他者を気づかい親切にする心の大切さを主張しており、それを心のバリアフリーと表現したことが見事です。

町の一員として、問題意識を持つと共に暖かい視線で社会を見ていますね。さらにＳＤＧｓへ視野を広げていることは筆者の今後の成長を感じます。

☆＊＊ 銀賞 ＊＊☆

「まほうから無限の笑顔」

立野小学校　六年　齋藤　陽

「おはようございます」ぼくは毎朝このようにあいさつをしている。すると、ぼくがあいさつをした人もあいさつをしてくれる。でもなぜかぼくは物足りなさを感じていた。それはどうしてだろうか。

昨年より、コロナウイルスの感染が拡大し、皆がマスクをするようになった。それにより、お互いの顔が見えにくくなっている。表情が見えないと相手の気持ちも分かりづらくなってしまった。そんな時代にぼくたちは、ただあいさつをしているだけでいいのだろうか。もっと相手に伝わるようなあいさつをする必要があるのではないだろうか。その時、ぼくが最初に物足りなさを感じていた理由が分かった。それは、お互いに目を合わせずにあいさつをしていたことにより気持ちが伝わっていなかったからだ。口元が見えない今だからこそ目を合わせる重要性が増している。だが今に限らず、これから先もずっと目を合わせてあいさつができれば、大きな笑顔が生まれ明るい町に一歩近づくと思う。

ぼくが目を合わせてあいさつをする大切さを実感したのは二つの理由がある。

一つ目は、ぼくの小学校での取り組みである「あいさつ習慣」でのことだ。ぼくのクラスでは、積極的に皆があいさつをするように心がけるようになった。すると、とてもいいことがあった。それは、自然と会話が生まれるようになったのだ。それに、あまり話したことのない友達とも話せるようになり、色々な話題で盛り上がれて、明るく楽しいクラスになった。相手の目を見てあいさつをすることは、会話を生み出す「まほう」なのかもしれない。

二つ目は、ぼくが父とラーメン屋に行った時の事だ。ぼくはラーメンを食べ終わった後「おいしかったです。ごちそうさまでした。」とお店の人に自然と口にした。するとお店の人が「ありがとう。」と笑顔で言ってくれて、父にもほめられた。ぼくは不思議と幸せな気持ちになった。お金を払っているから、食べられて当然と思うのではなく、作ってくれたことに感謝することが大切だと改めて感じた。このような感謝を伝える時にも、ぼくは目を見て気持ちを伝えることが大切だと思った。

どうして今まで目を見てあいさつをすることができない時があったのか。それは、はずかしいという気持ちが邪魔していたからかもしれない。でも、はずかしいからといって目も見ずあいさつもしないでいるとその先のチャンスを逃してしまうと思う。勇気を出して相手と目を合わせてあいさつをすれば、その先には素敵な笑顔や会話が待っている。みんなが目を見てあいさつをすればコロナで暗くなってしまった町も明るい笑顔のあふれるよりよい町になると思う。だからぼくは、相手の目を見てするあいさつの無限の可能性を信じている。

〈講評〉

マスクをしての生活が続く中で、目を合わせてあいさつをすることが気持ちを伝えることにつながるということに気付いた筆者。それを意識していく中で、自然と会話が生まれるようになった経験がみずみずしく描かれています。素敵なあいさつを交わすことで、明るい笑顔のあふれる町にしていきたいという願いを大切に、今後も豊かなかかわりを広げていってほしいです。

☆＊＊ 銀賞 ＊＊☆

「人間のチカラ」

立野小学校　六年　藤田　明凛

「目が見えない」たった一つの違いで周りから非難される。同じ人間なはずなのに、変な目で見られる。このようなことはあってはならないと私は思います。

私は犬を飼ったことがあります。ただの犬ではありません。「パピー」と言って、盲導犬になれる素質を持っている犬です。私はこの「パピー」を十ヵ月預かる「パピーウォーカー」に参加しました。パピーウォーカーの目的は人間社会に慣れさせる、ということですが、私は犬を預かるのがはじめてだったため、初めは家族の足を引っ張ってばかりでいました。みんなの役に立てず、落ち込んでしまっていたとき、私が預かった「ブリス」は私のひざにのってきてくれました。なぜだか分からなかったけれど、心に溜まっていた厚い雲が流れて青い空になっていくようでした。

ある日、「レクチャー」と言う、パピーの成長状況を報告したり、育て方の指導を受けたりする会に、盲導犬のユーザーさんが話をしに来て下さいました。ユーザーさんは「人生のパートナーである盲導犬なのに店員さんにお店に入るのを拒否されてしまう。」と悲しげに話していました。本来なら、法律で、盲導犬を含む補助犬は入店可能とされています。盲導犬は人の気持ちを分かってくれます。私はこのことを胸を張って言えます。ですが、まだ、盲導犬は普通のペットと同じ扱いを受けています。みなさんはどう思いますか。周りの人と何一つ変わらないのに、もし自分だけ違う扱いを受けたら。たぶんみなさんは、不快に思うでしょう。世界中の誰もがそのように感じるでしょう。私はこのような現実を知ったとき、悲しみと同時に怒りを覚えました。その日から私は、盲導犬への理解を求めるために、近所の人や親戚にパンフレットを配ったり、機会があればチャリティー活動に参加したりするなど積極的に活動するようになりました。今、私のもとにパピーはいませんが、緊急時に犬を預かる、「一時預かりボランティア」に入っています。

みんな同じ人間です。障害があろうがなかろうが、全員人間です。誰かを非難する理由などありません。だから私は、人が感じる気持ちもみんな同じだと思います。けんかして怒ったり、何かを成功させて喜んだりするとき、反対に笑ったり、悲しんだりする人はいないでしょう。人間の心はいつかつながれるので、私はこれから、お互いを認め合い、共感し合う、人間のチカラを広めていきたいです。そして、笑顔であふれる未来をつくりたいです。では、最後に質問です。みなさんは「目が見えない」と聞いて何を思い浮かべますか。

〈講評〉

「パピー」を育てた経験から、目の不自由な方が安心して暮らしていくために、自分にできることは何かを考えるようになった筆者。様々な人が、お互いを認め合い、共感し合うことで、笑顔であふれる未来にしていきたいという願いがこめられた作文です。筆者の思いが広がり、誰もが安心して豊かにかかわりあえる中区にしていきたいですね。

☆＊＊ 銅賞 ＊＊☆

「未来の本郷町にむけて」

大鳥小学校　六年　北野　瑠海

いつの間にか、町で声を掛けてくれるおばあちゃんがいなくなっている。そう、この町でも高齢化が進んでいる。そんな町を支えてくれているのは神鳥さんだ。「これ、今週のキャップね。」神鳥さんは水曜日の朝ペットボトルキャップを持って来てくれる。このキャップは世界を救うことが出来る。その大事なキャップを受けとる班長の背中を、私はずっと見てきた。私ならきっと「分かりました。」と素直に受けとれない気がする。なぜなら自分が集めた物じゃないという申し訳なさとおじいちゃんやおばあちゃんが、未来のことを考えていてくれる、というありがたさがあるからだ。やがておばあちゃんのように可愛がってくださる方たちもこの町からいなくなる。

私は、そんな優しさが溢れる本郷町で小さなことを続けて未来をつないでいきたい。例えば回覧板。私の近くにはお一人で住んでいて回覧板を回すことができないお年寄りの方がいる。足が不自由になってきた高齢者の方に変わって、回覧板を積極的に回すのはどうだろうか。そうしたら、沢山の高齢者の方に会う機会が多くなると思う。高齢者の方の顔や住んでいるところがわかってきたら、自然と町で会った時に挨拶ができると思う。そうすると、交流が深まる。交流は互いの信頼も深まる。本郷町は、木が多いから木の手入れを手伝うのもいい。重い木々をごみ収集に持ち運ぶだけでもとても重労働だと思う。

私はいつも公園をきれいにしてくださる人を知っている。雨の日も風の日も毎日欠かさず、その方は夕方になると公園の片付けをして、忘れ物があると持ち主が見つかるまで自宅で預かってくれる町内会長の福住さんだ。福住さんがいないと、公園が成り立たないぐらい、大切な存在だ。コロナウイルスの時だからこそイベントやお祭りに参加することが福住さんを支えることだと思う。以前、夏のお神輿を行った時、10人程度しか参加していない現状を実感した。声に出していなかったけれど、参加者の少ない状況にとても心が痛んだと思う。子どもの人数が少ない町内だからこそ、大人や高齢者の方とのふれあいを増していきたい。

一人では本郷町を変えられない。この高齢化は、本郷町全体をみんなで支えていかなければいけない。みんなで歩み寄っていくうちに町がひとつにまとまれば、感謝という気持ちで溢れる本郷町になると思う。私たちのことを見守ってくれる感謝。そしてお互いに支えてもらっている感謝。何かあった時には人一倍全力で助け合う感謝。必ず笑顔で手をふってくれる優しさの感謝。昔の出来事を語り繋いでくれる感謝。未来を思ってくださる感謝。

そのようなこの町にある沢山の「感謝」の中で私は成長した。今度は私たちが助ける。支えてきてくれた沢山の人々を私たちで支える。本郷町の未来を担っていくのは私たちだ。

〈講評〉

本郷町に住む方々との実際のかかわりから感じたことを、生き生きと表現しています。高齢化が進む町の中で自分ができることは何か、身近なことに着眼点を置いて考えているところが素晴らしいです。

人とのかかわりの中で成長してきたからこそ感じる感謝の気持ちを、未来へとつなげられる人に育っていってほしいです。

☆＊＊ 銅賞 ＊＊☆

「世界中の人々とつながるために」

立野小学校　六年　石上　凱久

僕は、立野小学校に入学した時、幼稚園の友達としか話すことができませんでした。なぜなら、初めて人とは話したくてもどこから話したらいいか分からなかったし、なによりはずかしかったからです。

しかしある日、ある友達が「仲良くしようね」と声をかけてくれました。不思議なことに彼は、緊張もしていなかったし、はずかしそうにもしていなかった。ただ、友達になりたいという感じで声をかけていた。僕はこの時、「彼のようにはずかしがらず、自分の思いを伝えればわかってもらえるかもしれない」という希望ができました。

それから、少しずつクラスの人にも「仲良くしてくれない？」と声をかけられるようになり、その時「いいよ。ありがとう」と相手が言ってくれて、安心と一緒に「うれしさ」が込み上げてきてもっとたくさんの人と仲良くなりたいと思うようになりました。そして、ついには学校だけでなく、お店の人や交番の人や近所の人なども積極的に「おはようございます」や「こんにちは」が言えるようになっていました。

僕が学校外の人との会話などで一番心に残っているのは「北欧」さんとの会話です。

僕は、五年生の時に総合の学習で「持続可能な農業、林業、水産業」について深く学習し、持続可能についてより多くの人に知ってもらうため、「ＳＤＧｓ弁当」を作って洋食レストラン「北欧」さんに売ってもらうことになりました。そして無事完売した後、クラスのみんなでお礼を言いに行った時、自然に言葉が出て「おはようございます」と誰よりも先に言うことができました。僕たちは感想を言いにもう一回「北欧」さんの所に行った時、「北欧」さんのおばちゃんが「みなさんのお陰で私達も色々勉強させていただきました。ありがとうございました」と言ってくださって、やはり「ありがとう」を使うとおたがいに良い気持ちになるんだなと確信することができました。

僕は今、町中の人々に声をかけることができていて時間があるのなら、より長く、より多くの人に声をかけて仲を深めていきたいと思っています。

しかし、コロナ禍で感染を抑えないといけないので人との会話が減って来てしまっている。これでは僕が夢見る「世界中の人々と仲良く共存できる世界」が夢で終りになってしまうので、僕は抑え気味にでも話せる機会があれば、できる限りたくさんの人に声かけを行っていきたいです。

それが、いつか世界中の人々が一つの絆でつながれるために大切なことなのではないだろうか。

〈講評〉

声をかけることに苦手意識をもっていた筆者が、友達とのかかわりをきっかけに、自分から声をかけたり、あいさつをしたりすることができるようになった体験談が具体的に描かれています。また、総合的な学習の時間にかかわったお店の方とのつながりを通して、筆者が人とコミュニケーションをとることの大切さに気付くエピソードも素敵です。これからも声をかけることやあいさつをすることを通して人と豊かにかかわっていけるとよいですね。

☆＊＊ 銅賞 ＊＊☆

「差別のない明るいまちへ。」

立野小学校　六年　速水　玲愛

差別。私はどこか遠い存在の言葉として考えてきました。新型コロナウイルスが、私達の生活を変え一年がすぎました。私は、この中、差別されるかもしれない不安をたくさんかかえてきました。

私の父は医師です。横浜で、コロナウイルスかん者さんが来てからずっとコロナかん者さんの治りょうをして来ました。少しだけテレビに映った父の姿は、全身を防護服で隠し、息をするためのホースが背中から入っていました。「これを着ると息が苦しく、暑いけれど、一度着ると、トイレに行くことができず、水も飲むことができないんだよ。」と教えてくれました。かん者さんの具合が悪くなると休みの日も夜でも電話がかかってきて、病院に行ってしまいます。この前も、これから夜ご飯という時に、行ってしまいました。そんな父を私は、ほこりに思います。しかし、それをなかなか話すことができませんでした。差別されるかもしれないと思ったからです。

私が考える差別とは、病気や障害のある人への差別と東京オリンピック開さいをめぐる意見がちがう人同士の差別です。私が考える差別の原因とは、病気や障害のある人への差別は、病気のことを知らず、移るかもしれないと考えたり、皆と少しちがう行動を取ることがありそれを理解できないと感じたりするからだと思います。このような心の動きは、不安感や恐怖感を生み相手を遠ざけたいと考えるようになると思います。また、意見が違う人同士の差別は、言っている相手自身を知らないのに違っている意見に気持ちが向き、その相手への嫌な気持ちが湧いてしまい相手を遠ざけようと考えるからだと思います。

自分とは違った意見を持つ人、自分には理解できないところがある人は、自分から、遠ざけた方が安心だと思うので、関わらないようにしてしまう。これが差別の正体だと思います。では差別をなくすために、自分はどうしたらいいのかと考えました。まず嫌だな、怖いなと感じた時はすぐに拒否せずになぜそう思うか考えてみること。次に、相手を知って理解する努力をしてみること。そうすると相手の良い所が見えてきて、仲が深まると思います。仲が深まると、相手に対する不安や恐怖の気持ちは少なくなって差別がなくなると思います。

私の好きなこのまちを、差別のないだれもが安心して暮らせる明るいまちにするために、相手を理解しようという気持ちを持ち続け行動に移していきたいです。

〈講評〉

自分の体験談をもとに、差別の不安について具体的に表現されています。「自分と違った意見をもつ人や理解できないところがある人を自分から遠ざけた方が安心、これが差別の正体だからこそ、相手を知ろうとする努力が大切」だと筆者は述べています。自分の好きな町が誰もが安心して豊かに暮らせる町になるよう、自分にできることについて考えることができました。

中学生部門

☆＊＊ 金賞（中区明るい選挙推進協議会会長賞） ＊＊☆

「三年後のために」

横浜雙葉中学校　三年　関口　ひかり

夏休み、自転車で図書館へ向かう途中、あるポスターが目に入る。「横浜市長選挙候補者。」家に帰って郵便受けを見ると、葉書が入っている。「期日前投票のご案内。」ポスターを見て、葉書を見て、立候補者の名前を見て、「この人、読めない漢字の名前だな」等とか思いながら、ふと、自分の住んでいる街の選挙を他人ごとのように思っている自分に気付く。

二〇一六年に公職選挙法が改正され、選挙年齢が十八歳に引き下げられてから早くも五年が経った。当時十歳だった私は十五歳になり、あと三年で選挙権を持つことになる。この公職選挙法改正の要因の一つは若者の政治離れにあると言われている。選挙年齢を引き下げることで若い内から社会の一員だという自覚を持たせ、政治へ目を向けてもらおうというものだ。ただ、私はこの理由に疑問を持たずにはいられなかった。つまり、若者は、そんなに社会の一員という意識が欠落しているのか、ということだ。

誰しも、社会で生きている限りは「世の中の役に立ちたい」という気持ちは持っているのではないかと私は思う。実際、二〇一五年に行われた内閣府の調査で「社会の為に役立ちたい」と答えた二十代は六十七・二パーセントと、他の年代よりはやや低いものの、そう懸念する程低くはない。だが、若者の投票率が低いのはデータとして事実であり、思うように向上しない。それは何故だろう。将来への希望や世の中への不満を意思として表示するには選挙はまたとない機会であるはずだ。

だが、私はここで、自分のそうした意思が選挙とは直接結びついていない事に気が付いた。私は選挙や政治に興味があり、公民の授業も大好きで、すっかり「政治に関心がある」気になっていた。だが実際は、例えば今回の横浜市長選挙だけを取っても、誰がどの政党で、どんな公約を掲げていて、それを実現するのにどんなプランを持っているのか、まったくと言っていい程知らなかったのだ。カジノ反対という法案を聞いて、それを良いなとは思っても、具体的な計画はあるのか、賛成派の人をどう説得するのか、代わりの経済政策はあるか等まで考えが回らない。

私は「政治に目を向ける」という事はこのような事ではないかと思う。自分の理想や希望、あるいは不平や不満と言った声、社会にこうして欲しいという思いや、こうであっったらもっと多くの人が幸せになるのではという意見を、自分の中だけにとどめて満足しない事。大切なのはその先で、その願いや不満を、より具体的に考え、政治という場で行使してくれる人に預けられるよう、知っておくことだ。

政治は一方通行でなく、相互的なものが理想だろう。三年後、その関係をつくりあげる一員となれるよう、これからの生活を過ごしていきたい。

〈講評〉

最近の新聞によれば、投票率の低下が目立ち、日本、英国、イタリアでは10％超下落したとあります。日米英など先進国で世論の5～9割が政治制度の大幅・抜本的改革が必要と答えており、民主主義の危機として選挙制度も変革期かもしれません。

そのような中、今年度の中学生部門の作品からは、選挙や投票について、具体的な主張が述べられていました。インターネット投票の提案、スウェーデンの「学校選挙」、さらには僅差で決定された英国のＥＵ離脱国民投票もあり、未来を担うみなさんが投票の大切さについて実感していることがわかり、大変心強く思いました。

その中でも、この作品は市長選を通してのカジノについての賛否の背景にも触れながら、政治を身近に捉え、投票行動と相互作用の大切さを訴える、優れた作品でした。

☆＊＊ 銀賞 ＊＊☆

「選挙は遠くて近いもの」

仲尾台中学校　二年　櫻井　駿斗

最近になって横浜市長選挙を知らせるのぼりや横断幕が目に留まるようになった。選挙カーも何度か見かけたが、いつもと違うのは候補者の名前を連呼するマイクの声を聞かないことだ。コロナ感染拡大により大きな声が出せない中、選挙に人々の関心を向けるのは大変そうだと思った。実際、選挙権のない自分も全く興味すらなかった。しかし、高校三年生の姉に初めての投票の案内が届いたことで、何だか身近なことのように感じた。

そんな時、母に勧められてある記事を読んだ。横浜市に住む中学一年生が夏休みの課題として市長選に立候補した八名の候補者に共通の質問六つをインタビューし、まとめたというものだった。質問の一つに中学校給食は現在選択制デリバリー式だが、それを継続していくのか、自校式、親子式、センター調理式に移行するのかというのがあり、興味を持った。候補者は食育や生産者の思いを優先的に考える人、経済格差や共働き世帯の増加など家庭事情を考慮する人、政令指定都市で唯一、中学校給食がないことに疑問を持つ人など、様々な意見があった。同じ自校式を推奨する人でも理由は異なるため、自分の考えと近い人を探すには、結論だけを見て判断するのではなく、そこに至った考えを聞いてみることが必要だと思った。ＩＲの質問に対しても、賛成、反対の立場を取る理由はいろいろあり、カジノができたら治安が悪くなりそうだから嫌だと思う自分の考えに似た候補者をみつけてみるのも楽しかった。

横浜市の中でも中区は選挙投票率が低いと言われている。選挙には興味がない人が多いのかもしれないが、この記事を書いた中学生のように自分から声を聞いてみることで、市政が案外身近なものであることに気づいたり、思わぬ発見が興味の糸口になったりするのではないかと思う。中区は外国人居住者や観光客の数も多く、たくさんの人の目に触れる機会があるので、いつまでも魅力的で安全な街にしてくれそうなのは誰かを探してみるのも面白そうだ。

いつもに比べてとても静かな選挙だが、こんな時こそどんな人がどんなことを考え、どんな横浜ができるのかをじっくり知ることで、選挙に行ってみたいと思えるようになるかもしれない。姉にも是非この記事を読んで、投票に行ってほしい。

〈講評〉

このコロナ禍によって人々の生活様式が大きく変わりましたが、それは選挙にも及んでいることに気づく着眼点と、勧められて読んだ新聞記事から自らの意見を導き出す思考の広がりがこの文章のすばらしい点であると思います。筆者には、ぜひこの契機を生かして「いつまでも魅力的で安全な街にしてくれそうなのは誰か」を考え続けてもらいたいです。このような若者が一人、また一人と増えていくことが、街づくりを支えていくのだと感じます。

☆＊＊ 銀賞 ＊＊☆

「納得する政治のために」

横浜吉田中学校　二年　永井　悠理

ぼくが思う選挙の意味とは、「自分たち一人一人が政治に参加する」ことだと思います。

ぼくたちは普段、めったに政治に関わることはできません。実際に議論して、政治をどうしていくかを決めていくのは議員の方々です。しかし、選挙に行き、投票することで、議員の方を選ぶという最も根本的な部分に関わることができます。ぼくは、全てにではなくてもいい、少しか関われなくても、たくさんの人が政治に関わることが大切だと思います。

中学校の僕の学年では、１年生の時ベランダを使用することができませんでした。理由は、「危ないから」です。僕はこれに納得することができませんでした。この学年に悪ふざけでも落とすようなことをする人はいないし、事故で落ちてしまう前に、ルールを決めておけばいいのではないか、と思ったからです。そこで、僕はこの学校に「目安箱」というものがあるのを思いだしました。目安箱とは、自分の意思を用紙にかき、提出すれば生徒会本部に届く。というものです。僕はその紙をかき、しょ名を集めました。そしてそのころの学級委員会でベランダについての話し合いがあったので、そこで提出しました。そのこともあり、先生方にも納得してもらいルール付きでベランダがつかえるようになりました。

この目安箱にあたる物が、日本においての選挙だと思います。データでは平成三十一年四月七日執行の横浜市議選挙の投票率は全ての年代で五十％を下回り、特に二十代の投票が少ない結果になっています。これは半分以上の意見が政治に影響されていないということです。これでは、本当に全員が納得しているとまではいえないのではないでしょうか。

ぼくは十八才以上になったら選挙に行きます。なぜなら自分なりに悔いのないように、納得した政治の中で過ごしたいからです。少ししか関われなくても、できるだけ全ての人が政治に参加する。そんな夢が現実になることを願っています。

〈講評〉

筆者は政治とは何か、選挙とは何かに真摯に向き合い、考えた結果を中学生の視点から捉え、自分の身近な社会である中学校に反映させて意見を述べています。ここでは「目安箱」に意見を投じることで中学校（社会）を動かすことができたことから、選挙で意見を投じることの肝要さに気づくことができた様子が伝わります。そして「ぼくは十八才以上になったら選挙に行きます。」と締めくくっているように、この活動を通して得た経験や思いをこれからの人生の糧にしてほしいと思います。

☆＊＊ 銅賞 ＊＊☆

「投票率の低下への解決策とは？」

仲尾台中学校　三年　池田　怜那

選挙の投票率が低いことの原因は、人々の選挙への関心が低いことである、というのは誰もが知っている。私も、学校の選挙管理委員会の委員長を本年務め、生徒の生徒会役員選挙への関心が低いことを改めて痛感した。それの解決策がとても難しいのだ。

私は二年以上選挙管理委員として生徒の選挙への意欲を高めさせようと努力した。例えば、ポスターの掲示、アンケートの実施、新聞の配布などを行った。だが、それらは効果のあるものとはならなかったように思える。そもそもポスターや新聞を見ない人が多かったのであろう。王道の取り組みではなく、何か変わったことをしなければならない。

この現状は、横浜市議会議員選挙にも当てはまるのではないだろうか。普通選挙法が制定された一九二五年頃、女性の参政権が認められた戦後すぐなどの時代では選挙で投票できることに対して大きな喜びを得ていたはずだったが、今は投票をしたがらない人が増加している。横浜市議会選挙では、一九四七年は七十パーセントを超えていたのが、二〇一九年には四十パーセントを下回っているというデータが残っている。このまま何もしなければ、投票率はより低下していくことだろう。

投票率を上げるために最も効果的なことは、学校での選挙についての教育を充実させることだと思う。実際、若年層の投票率が特に低いそうだ。だから、義務教育期間で選挙の正しい知識を身につけることが直接投票率を上げることにつながる。中学校三年生の公民の分野で選挙について学ぶ。だが、それは選挙に関する法律や衆議院、参議院等のしくみであって、身近な選挙の投票方法を知ったり、投票することのメリットを知るものではない。そのため、公民とは別に選挙について学ぶ時間が必要である。

また、若者の投票率が低いことの最大の原因は、時間がない、会場に行くのがめんどうであることだと思う。これに対する解決策は、既に導入している国もあるインターネット投票を活用することだ。この方法は、公正さが疑われるなどの理由で導入が難しくなっている。仮に実現できれば、会場が遠くても、時間がなくても若者が好きなスマートフォン等のデバイスで投票できる。ただし、インターネットを利用できない環境に住む人々もいるため、会場をなくすことはできない。

このように、選挙の投票率を上げるためには、選挙に関する教育、インターネット投票などの新しい投票方法の導入をしていく必要がある。私も、学校での生徒会役員選挙に生徒に関心を持ってもらうために、新たな取り組みをしていきたい。

〈講評〉

筆者は世間の選挙への関心の低さを、自身が担った自校の選挙管理委員会での出来事を通して捉えています。「ポスターの掲示、アンケートの実施、新聞の配布」など様々な取り組みを行ったうえであまり効果がなかったことから、選挙の投票率を増加させるためにどうすれば良いのか、そしてそのための解決策とはなにかに言及しています。そのなかで筆者は「選挙に関する教育、インターネットなどの新しい投票方法の導入」と具体的な提案があるところから、われわれ大人たちが働きかけをしなければならないのだと痛感しました。

☆＊＊ 銅賞 ＊＊☆

「「今の私たち」なら」

仲尾台中学校　一年　池田　華江

クーラーがきいた部屋に一人、二十四時間テレビを見る。両親は横浜市長選挙へ出かけていた日だった。そこで私はある企画が目に止まった。その名も「世界変えたいこと会議」だ。十代の学生達がそれぞれ「変えていきたいこと」を話し合い、お互いの意見を認め、深め合える場であった。そうか。選挙とはこのように自分の強い意志を発信できる機会なのではないだろうか。未来を作っていける数少ないチャンスではないか！だが、それにも関わらず、今の若者は投票率が低いという現実があるのは確かだ。横浜全体としても戦後直後と比べて投票所へ足を運ぶ人は退潮傾向にある。

では、なぜこのような状況にあるのだろうか。今の若者はどのような思いなのか考えてみた。投票に行くこと自体が憂鬱なのか？そもそも意見がないのだろうか？それとも候補者の宣言に信用性がないため投じることができないのかもしれない。私も選挙公報やポスターを見ていると、「もしも宣言と行動や発言が矛盾していたらどうするんだ？」と感じたことがある。ただ、だからといって、偏見を持ったり、批判するのは違う。それをなくすためも含めて、実際に今の若者達の正直な意見に耳をかたむけるべきである。ネット上では「横浜の再生を願う」「市民が使えるWi-Fiを整備してほしい」などの意見が飛び交っていたのも知った。そこで私はあるアイディアが浮かんだ。あの「世界変えたいこと会議」のような場を作ることだ。選挙では意見を共有するのは難しいのかもしれない。だが、そのようなものを設けることで、様々な考え方や思いが反映するのではないか。選挙に対する概念が変化する可能性もある。年代を問わず、横浜市民として、政治の主人公として、皆が「未来を変えていこう」と考えるキッカケにもなるはずだ。

選挙の「一票」について深く考える必要はないのではと思い始めた。一票とは自分の意志を乗せた特別なチケットのようなものに感じる。時にはそのチケットで大きな変化を呼ぶこともあるためだ。その「重み」を理解できれば、だからこそ投票へ行くべきだ、と気付けるのではないか。候補者である、彼ら彼女らだって、臥薪嘗胆の思いで立候補したはずだ。その思いを受け取って、一票で答えるべきなのではないだろうか。返すべきであろう！「世界変えたいこと会議」のように様々な意志の中、それぞれ違うテーマであっても「じゃあこうするべきだ」とアイディアを浮かばせて、全力で考えて、全員が納得できるまで、意見を重ね合わせていく。そして、その意志を実現へと導く。お互いを認め合う。現実から目を背けずに、向かい合って、誇れる国を作っていこうではないか！

私も選挙に参加できる日を一日千秋の思いで待とうと思う。「今の私たち」なら実現へと導けるはずだから。

〈講評〉

選挙の投票率が低下しているといわれている昨今で、「世界変えたいこと会議」を目にしたことに端を発して、未来の有権者としての視点から選挙に対する意見が述べられているところに興味深いものがあります。文章中の感嘆符や力強く言い切る語尾、「私も選挙に参加できる日を一日千秋の思いで待とうと思う」と締めくくっているところから筆者の熱い思いが伝わってきます。ぜひこのまっすぐな思いを、これからも自分の軸にしてほしいと思います。

☆＊＊ 銅賞 ＊＊☆

「投票と自分の未来」

本牧中学校　三年　川村　雄翔

夏休みの間に、横浜市長選挙があることを知りました。いつもなら、選挙があっても全く気にしないのですが、我が家では姉が初めて選挙権をもったので、家の中でもどのように立候補者を選ぶのかの話をしていたので僕も参加しました。

選挙自体どのようにやるのか、投票する人をどう決めるのかを教えてもらいました。

立候補者は、マニフェスト（公約）を挙げているので、有権者である自分が、思う街づくりを挙げている人を選ぶと、僕達の意見が反映された街ができることがわかりました。

そのためには、街で選挙カーの音がきこえたら耳を澄ませて聞いてみたり、自分から気になる人について調べることが必要になってきます。

選挙に参加しないと自分たちにとって住みにくい街になってしまうかもしれません。また、他の地域の人たちにマイナスイメージを与えてしまう可能性もあります。

実際にイギリスはＥＵを離脱しましたが、その時も離脱したくなかった人たちの中で投票に行くのを面倒くさがった人が多かったのかもしれません。それぞれがどんな理由であっても離脱反対派の人の投票が少なかったために離脱賛成の人達が上回って、離脱してしまったというのが現実です。ですがＥＵ離脱に反対だと今も訴える人がたくさんいます。日本のニュースでも反対派のデモなどがたくさん取り上げられますが、国民投票を行ったイギリスが出した答えは、間違いなく投票に参加したイギリス国民の意見を取り入れた結果です。

このように少し参加しなかっただけで国全体が変わってしまうこともあります。

「自分のたった一票で変わるわけがない」と思っている人もたくさんいるはずです。ですが自分たちの意見を街に反映させるということは自分たちの未来をより良いものにするということに繋がるのです。「選挙」＝「国や街の在り方を考える」と考えると難しく面倒に感じますが、「選挙」＝「自分の未来をより良いものにする」と考えると今までより向き合いやすくなると思います。

自分が行かなかったのに選ばれた人の悪口などをＳＮＳなどに書くのはおかしいと思います。まだ選挙権をもらえない中学生などの意見も近くの大人に話して選ぶ人を決める際の意見として反映させることも出来ると思います。僕は母に言って中学校の給食化を進めている人はやめてと言ってみたりしました。なのでまだ選挙権を持っていないからと言って関係ないと思わずに周りの大人に言ってみたりどうにか自分の意見を伝えてみたりしてみるのもありだと思います。

その意見が必ず反映されるとは限りませんが、今から自分の意見や考え方をもって、立候補者の公約をよく読んでみるのも将来、有権者になった時に役立つのではないかと感じました。

〈講評〉

今まで選挙に対して無関心であった筆者が、姉という身近な人物を契機にして選挙に向き合っていき、「今から自分の意見や考え方をもって、立候補者の公約をよく読んでみるのも将来、有権者になった時に役立つのではないか」と思うまでに至る心境に、このひと夏での大きな成長を感じました。また、意見が必ず反映されるわけではないが、意見を投じることで「自分たちの未来をより良いものにする」という筆者の前向きな思考に、未来を担う若者への期待を抱かずにはいられません。

審査をふりかえって

小学生Ａ部門では、まちのよさはもちろん、みなさんのまちへの愛情がひしひしと伝わってきました。中区を訪れたことがない人にはまちのよさが伝わるでしょう。私は作文を読んで、みなさんが紹介してくれた場所を巡ってみたいと感じました。一方、中区に暮らす人は、まちの魅力を再発見できそうです。

みなさんの作文で、大切なまちを多くの人に知ってもらえそうですね。

小学生Ｂ部門では、より良いまちをつくるために、さまざまなアイデアが挙げられていました。まちの良さをとらえながら、まちが抱える課題を取り上げ、その背景をさぐったり、解決策を考えていました。このような経験が、これから先、問題解決をする力につながるのだと感じました。

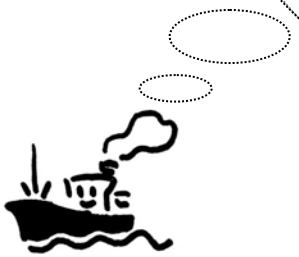
みなさんが考えた具体的なアイデアが実現できたら、まちがさらに良くなるのではないでしょうか。

中学生部門では、選挙について、関心をもってニュースを見聞きし、情報収集をしている姿が垣間見えました。選挙そのものについて考えを深めたり、投票にまつわる改善策を考えたり、自分ごととしてとらえていることを嬉しく感じました。特に３年生は公民での学習を活かしながら、自分の考えを順序立てて書くことができました。

より良いまちづくりに欠かせない選挙について、まずはみなさんの考えを校内から広めてみてはいかがでしょうか。

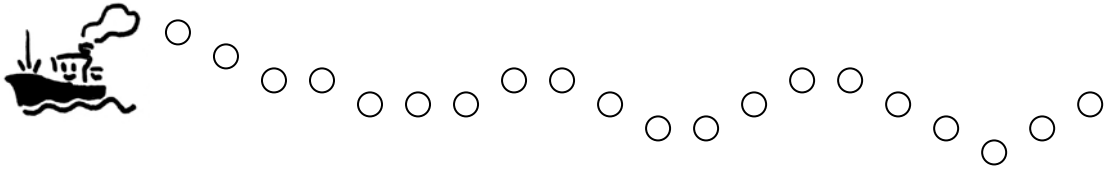
今回の作文を読んでいて、みなさんの観察力に感動しました。日々の生活で気づいたことや気になったことを、お気に入りのノートに書きためてみるのもいいかもしれませんね。

これからも、自分で考える時間を大切にし、文章にする力を磨いてください。書いた文章を発信することで、みなさんの周りから変えていけるはずです。



■作品の選考・講評■

横浜市立間門小学校教諭	石橋　美波
横浜市立元街小学校教諭	渡邉　裕子
横浜市立本牧中学校教諭	小川　玲奈
横浜市立本牧中学校教諭	佐藤　法子
横浜市中区明るい選挙推進協議会会長	大村　崇夫
横浜市中区選挙管理委員会委員長	山中　利弘
横浜市中区長	直井　ユカリ



第４１回
中区明るい選挙推進作文コンクール入賞作品集
令和４年２月発行
発行
中区明るい選挙推進協議会／中区選挙管理委員会／中区役所
〒２３１－００２１
横浜市中区日本大通３５番地
ＴＥＬ　０４５－２２４－８１１６
ＦＡＸ　０４５－２２４－８１０９

明るい選挙キャラクター
選挙のめいすいくん

横浜市中区のマスコット
スウィンギー

横浜市選挙のマスコット
イコットＪｒ．